

龍潭譚

泉鏡花

青空文庫

尼

大沼

五位鷺

九ツ罾

渡船

ふるさと

千呪陀羅

躑躅か丘

鎮守の社

かくれあそび

おう魔が時

躑躅か丘

日は午ごなり。あちら木ぎのたらたら坂ざかに樹きの蔭かげもなし。寺てらの門かど、
植木屋うゑぎやの庭にわ、花屋はなやの店みせなど、坂下さかしたを挟さしみて町まちの入口いりぐちにはあたれど、
のぼるに従したがいて、ただ畑はたばかりとなれり。番小屋ばんこゝめきたるもの小
だかき処ところに見みゆ。谷やまには菜なの花はな残りたり。路みちの右左みぎひだり、躑躅つづじの花はな
紅くれないなるが、見渡みわたす方かた、見返みかへる方かた、いまを盛さかなりき。ありくにつれ
て汗あせ少すくしいでぬ。

空そらよく晴はれて一点いっしんの雲うみもなく、風かぜあたたかに野面のづらを吹ふけり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいいたりしを、肯かで、しのびて来つ。おもしろきながめかな。山の上の方より一東の薪をかつぎたる漢おり来れり。眉太く、眼の細きが、向さまに顛巻したる、額のあたり汗になりて、のしのしと近づきつつ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかえり、

「危ないぞ危ないぞ。」

といわずに眦に皺を寄せてさっさつと行過ぎぬ。

見返ればハヤたらたらさがりに、その肩躑躅の花にかくれて、髪結いたる天窓のみ、やがて山蔭に見えずなりぬ。草がくれの径遠く、小川流るる谷間の畦道を、菅笠冠りたる婦人の、跣足にて鋤をば肩にし、小さき女の児の手をひきて彼方にゆく背

すがた
姿ありしが、それも杉の樹立こだちに入りたり。

行く方ゆかた方も躑躅なり。来こし方も躑躅なり。山土のいろもあかく見えたる、あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に歸らむと思う時、わが居たる一株の躑躅のなかより、羽音たかく、虫のつと立ちて頬を掠かすめしが、かなたに飛びて、およそ五六尺隔てたる処に礫つふてのありたるそのわきにとどまりぬ。羽をふるうさまも見えたり。手をあげて走りかかれば、ぱつとまた立ちあがりて、おなじ距離五六尺ばかりのところにとまりたり。そのまま小石を拾いあげて狙ねらいうちし、石はそれぬ。虫はくるりと一ツまわりて、また旧もとのようによぞ居おる。追いかくれば迅はやくもまた遁にげぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあわいを置きてはキラキラとささ

やかなる羽ばたきして、鷹揚おうようにその二すじの細き髯ひげを上うえ下したに
わづくりておし動かすぞいと憎にくさげなりける。

われは足踏あしづみして心いらてり。その居たるあとを踏みにじりて、

「畜生、畜生。」

と眩つぶやきざま、躍りかかりてハタと打ちし、拳こぶしはいたずらに土に

よごれぬ。

渠かれは一足先なる方かたに悠々と羽はづくろいす。憎しと思う心を籠こめ
て瞻みまもりたれば、虫は動かおおいずなりたり。つくづく見れば羽は蟻ありの形し
にかがやきたる、うつくしさいわむ方なし。

色彩あり光沢ある虫は毒なりと、姉上の教えたるをふと思ひ出

でたれば、打置きてすごすと引返せしが、足許あしもとにさきの石の二ツに砕けて落ちたるより俄にわかに心動き、拾いあげて取つて返し、きと毒虫をねらいたり。

このたびはあやまたず、したたかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあわせ、ひたと打うちひしぎて蹴けと飛ばしたる、石は躑躅ししつのなかをくぐりて小砂利をさそい、ばらばらと谷深くおちゆく音しき。
 袂たもとのちり打うちはらいて空を仰げば、日脚ひなたやや斜ななめになりぬ。ほかほかとかおあつき日向ひなたに唇かわきて、眼のふちより頬のあたりむず痒がゆきこと限りなかりき。

心着もときけば旧来かたし方にはあらしと思ふ坂道の異なる方にわれはいつかおりかけいたり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさき

とおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まわせば、赤土の道幅せまく、うねりうねり果しなきに、はて両側つづきの躑躅の花、遠き方かたは前後を塞ぎふさぎて、日かげあかく咲込めたる空のいろの真蒼まさおき下に、たらずイむはわれのみなり。

鎮守の社

坂は急ならず長くもあらねど、一つ尽つくればまたあらたにあらわ顕る。起伏あたかも大波のごとく打続きたて、いつ坦たんならむとも見えざりき。

あまり倦うみたれば、一ツおりてのぼる坂の窪くぼにみつく躑くいし、手のあ

きたるまま何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さという字も出来たり。くという字も書きたり。曲りたるもの、直すぐなるもの、心の趣くままに落書したり。しかなせるあいだにも、頬のあたり先刻さきに毒虫の触れたらむと覚ゆるが、しきりにかゆければ、袖もてひまなく擦こすりぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出来たるを、姉に見せばやと思うに、俄にわかにその顔の見とうぞなりたる。

立たちあがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあわいも透すかで躑躅咲きたり。日影ひとしお赤うなりまさりたるに、手を見れば掌たなそこに照りそいぬ。

一文字にかけのぼりて、と見ればおなじ躑躅のだらだらおりな

り。走りおりて走りのぼりつ。いつまでかかくてあらむ、こたびこそと思うに違たがいて、道はまた蜿うねれる坂なり。踏心地柔かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得え堪えずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きていつ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なお家ある処に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異ことならずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆう日あざやかにぱつと茜あかねさして、眼もあやに躑躅の花、ただ紅くれないの雪の降積めるかと疑わる。

われは涙の声たかく、あるほど声を絞りて姉をもとめぬ。一た

び二たび三たびして、こたえやすすると耳を澄せば、遙に滝の音聞
えたり。どうどうと響くなかに、いと高く冴えたる声の幽に、

「もういいよ、もういいよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びとい
うものするあい凶なることを認め得たる、一声くりかえすと、ハ
ヤきこえずなりしが、ようよう心たしかにその声したる方にたど
りて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて眺お
ろせば、あまり雑作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより
見えぬ。かくてわれ踏迷いたる紅くれないの雪のなかをばのがれつ。背後うしろ
には躑躅の花飛び飛びに咲きて、青き草まばらに、やがて堂のう
らに達せし時は一株も花のあかきはなくて、たそがれの色、境内

の手洗みたら水のあたりを籠こめたり。柵結こいたる井戸ひとつ、銀杏いちようの
 古ふりたる樹あり、そがうしろに人の家の土堀あり。此方こなたは裏木戸
 のあき地にて、むかいに小さき稲荷いなりの堂あり。石の鳥居あり。木
 の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鉄の輪
 を嵌はめたるさえ、心たしかに覚えある、ここよりはハヤ家に近し
 と思うに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。ただひとえにゆう日
 照りそいたるつつじの花の、わが丈よりも高き処、前後左右を咲さ
 照きうずりそいたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅くれないと、紫と、青せい
 埋くめたるあかき色はいろのあかき色はいろのあかき色がなかに、緑と、紅くれないと、紫と、青せい
 白くの光を羽色はいろに帯びたる毒虫のキラキラと飛びたるさまの広き
 景色のみぞ、画えのごとく小さき胸にえがかれける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救すくいを姉にもとめしを、渠かれに認められしぞ幸さいわいなる。いうことを肯きかで一人いで来しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑われなむ。優しき人のなつかしけれど、顔をあわせて謂いいまけむは口惜しきに。

嬉しく喜ばしき思い胸にみちては、また急に家に歸らむとはおもわず。ひとり境内たたずにぞみしに、わツという声、笑う声、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツまでなる児この五六人前後あとさきに走り出でたり、こはかくれ遊びの一人にんが見いだされたるものぞとよ。二人三人走り来て、わがそこに立てるを見

つ。皆瞳を集めしが、

「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勧めぬ。小家あちこち、このあたりに住むは、かたいというものなりとぞ。風俗少しく異なれり。児どもが親達の家富みたるも好き衣着たるはあらず、大抵跣足なり。三味線弾きて折々わが門に来るもの、溝川に鱒を捕うるもの、附木、草履など鬻ぎに来るものだちは、皆この児どもが母なり、父なり、祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒めつ。さるに町方の者といえば、かたいなる児ども尊び敬いて、しばらくもともに遊ばんことを希うや、親しく、優しく勉めてすなれど、不断は此方より遠ざかりしが、その時は先にあまり淋しくて、友欲しき念の堪えがたかりしその心の

まだ失せざると、恐しかりしあとの楽しきとに、われは拒まずし
うなずて領うきぬ。

児どもはさざめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返す
 とて、拳けんしてさがすものを定めしに、われその任にあたりたり。
おもておほ面を蔽えというままにしつ。ひツそとなりて、堂の裏崖がけをさかさ
 に落つる滝の音どうどうと松杉の梢こずえゆう風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可いいよ、もう可いいよ。」

と呼ぶ声、笏こだまに響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、た
 そがれの色また一ひと際襲きたい来れり。大なる樹おおのすくすくとならべ
 るが朦朧もうろうとしてうすぐらきなかに隠れむとす。

声したる方かたをと思ふ処には誰も居おらず。ここかしこさがしたれ

ど人らしきものあらざりき。

また旧もとの境内うちまの中央ちゆうに立ちて、もの淋しく曠みまわしぬ。山の奥にも響ひびくべく凄すさまじき音ねして堂どうの扉かどを鎖とぎす音ねしつ、闐げきとしてもものも聞えずなりぬ。

親おやしき友ともにはあらず。常にうとましき兒こどもなれば、かかる機おりりを得てわれをば苦くるめむとや企たくみけむ。身を隠ひそしたるまま密ひそに遁にげ去さりたらむには、探たづねばとて獲とらるべき。益やくもなきことをとふと思おもうかぶに、うちすてて踵くびすをかえしつ。さるにても万も一しわがみいだすを待ちてあらばいつまでも出でくることを得えざるべし、それもまたはかり難がたしと、心迷まよいて、とつ、おいつ、徒いたに立たちて困こづずる折こづしも、いづくより来きたりしとも見えず、暗くらうなりたる境内

の、うつくしく掃いたる土のひろびろと灰色なせるに際立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍かたわらに居て、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高き女なりし、その手を懐にして肩を垂れたり。優しきこえにて、

「こちらへおいで。こちら。」

といて前さきに立ちて導きたり。見知りたる女ひとにあらねど、うつくしき顔の笑えみをば含みたる、よき人と思いたれば、怪しまで、隠れたる児のありかを教うるときとりたれば、いそいそと従いぬ。

おう魔が時

わが思う処たがに違たがわず、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突つあたりきに小さきいな稲荷なりの社やしあり。青き旗、白き旗、二三本その前に立ちて、うしろはただちに山の裾すそなる雑樹斜おめに生おいて、社の上を蔽おほいたる、その下のおぐらき処、孔あなのごとき空地くうちなるをソとめくばせしき。瞳は水のしたたるばかり斜ななめにわが顔を見て動けるほどに、あきらかにその心ぞ読まれたる。

さればいささかもためらわで、つかつかと社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、朽葉うずたか堆うく水みづくさき土つちのにおいしたるのみ、人の氣勢けはいもせで、頸えりもとの冷ひやかなるに、と胸むねをつきて見返りたる、またたくまと思うかの女ひとはハヤ見えざりき。いず

かたにか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思わず啊呀あなやと叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅ゆに行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきもの居て人を惑わすと、姉上の教えしことあり。

われは茫然ぼうぜんとして眼を睜まなこみりぬ。足ふるいたれば動きもならず、

固くなりて立ちすくみたる、左手ゆんでに坂あり。穴のごとく、その底

よりは風の吹き出づると思う黒闇こくあん々たる坂下より、もののもの

るようなれば、ここにあらば捕えられむと恐しく、とここの思慮

もなさで社の裏の狭きなかににげ入りつ。眼を塞ふさぎ、呼吸いきをころ

してひそみたるに、四足よつあしのものの歩むけはいして、社の前を横

ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。
 さるにてもさきの女のうつくしかりし顔、優やさしかりし眼を忘れず。
 ここをわれに教えしを、今にして思えばかくれたる児こどものあり
 かにあらで、何等か恐しきもののわれを捕えむとするを、ここに
 潜め、助かるべしとて、導ごきしにはあらずやなど、はかなきこと
 を考えぬ。しばらくして小提灯こちようちんの火影ほかげあかきが坂下より急ぎの
 ぼりて彼方かなたに走るを見つ。ほどなく引返ひっかえしてわがひそみたる社
 の前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ちて来りきたし感あり。
 あたかもその立留たちどまりし折から、別なる登あしおと音、また坂をのぼ
 りてさきのもと落合いたり。

「おいおい分らないか。」

「ふしぎだな、なんでもこの辺で見たというものがあるんだが。」
 とあとよりいいいたるはわが家につかいたる下男の声に似たるに、
 あわや出でむとせしが、恐しきもののさはたばかりて、おびき出
 すにやあらむと恐しきは一しお増しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃たんぼの方でも廻つて見よう、お前も頼む
 。

「それでは。」といいて上うえ下したにばらばらと分れて行く。

再び寂せきとしたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手を
 かけて眼ばかりと思う顔少し差出だして、外との方かたをうかがうに、
 何ごとともあらざりければ、やや落着きたり。怪しきものども、何
 とてやはわれをみいだし得む、愚おろかなる、と冷ひやかに笑わいしに、思い

がけず、誰ならむたまぎる声して、あわてふためき遁ぐる^にがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の声なりき。

大沼

「居ないツて私あどうしよう、爺^{じい}や。」

「根ツから居さつしやらぬことはござりますすまいが、日は暮れまする。何せい、御心配なこんでござります。お前様遊びに出します時、帯の結^{むすび}めをとんとたたいてやらつしやれば好^よいに。」

「ああ、いつもはそうして出してやるのだけれど、きょうはお前私にかくれてそツと出て行つたろうではないかねえ。」

「それはハヤ不念ぶねんなこんだ。帯の結めさえ叩いときや、何がそれで姉様あねさまなり、母様おふくろさまなりの魂が入るもんだで魔エテめはどうすることもしえないでござす。」

「そうねえ。」とものかなしげに語らいつつ、社やしろの前をよこぎりたまえり。

走りいでしが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪あやしみたる。

悔ゆれど及ばず、かなたなる境内の鳥居のあたりまで追いかけたれど、早やその姿は見えざりき。

涙ぐみてたたずイむ時、ふと見る銀杏いちようの木のくらき夜の空に、大おおなる円まき影して茂れる下に、女の後姿ありてわが眼まなこを遮りたり。

あまりよく似たれば、姉上と呼ばむとせしが、よしなきものに声かけて、なまじいにわがここにあるを知られむは、拙つたなきわざなればと思ひてやみぬ。

とばかりありて、その姿またかくれ去りつ。見えずなればなおなつかしく、たとえ恐しきものなればとて、かりにもわが優しき姉上の姿に化けしたる上は、われを捕えてむごからむや。さきなるはさもなく、いま幻に見えたるがまことその人なりけむもわかざるを、何とて言ことばはかけざりしと、打泣きしが、かいもあらず。

あわれさまさまのもの怪しきは、すべてわが眼まなこのいかにかせ

し作用なるべし、さらば涙にくもりしや、術すべこそありけれ、か
 なたなる御手洗みたらしにて清めてみばやと寄りぬ。

煤すすけたる行燈あんどうの横長きが一つ上にかかりて、ほととぎすの画え
 と句など書いたり、灯をともしたるに、水はよく澄みて、青き苔こけ
 むしたる石鉢の底もあきらかなり。手に掬むすばむとしてうつむく時、
 思いかけず見たるわが顔はそもそもいかなるものぞ。覚えず叫び
 しが心を籠こめて、気を鎮めて、両まなこの眼を拭い拭い、水に臨む。

われにもあらでまたとは見るに忍びぬを、いかでわれかか
 べき、必ず心の迷えるならむ、今こそ、今こそとわななきながら見
 直したる、肩をとらえて声ふるわし、

「お、お、千里。ええも、お前は。」と姉上ののたまうに、縊すがり

つかまぐみかえりたる、わが顔を見たまいしが、

「あれ！」

といて一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいずてに衝つと馳はせ去りたまえり。
怪しき神のさまざまのこととしてなぶるわと、あまりのことに腹
立たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追いか
ぬ。捕えて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらもの
の口惜しければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大おお路みちと覚しき町にも出でたり、
暗こきみち径たども辿りたり、野もよこぎりぬ。畦あぜも越えぬ。あとをも見
ずか駈かけたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河のごと
く横よこたわりて、黒き、恐しき森四方をかこめる、大沼とも覺しきが、
前途ゆくてを塞ふさぐと覺ゆる蘆あしの葉の繁ふさきがなかにわが身体からだ倒れたる、あ
とは知らず。

五位鷺

眼すがすがのふち清々すがすがしく、涼しき薰かおりつよく薰ると心着く、身は柔か
き蒲ふとん団の上に臥ふしたり。やや枕をもたげて見る、竹ちくえん縁の障子あ
け放して、庭つづきに向いなる山やまふところ 懐なつかに、緑の草の、ぬれ色青
く生おいしげ茂りつ。その半腹にかかりある巖いわかど角の苔こけのなめらかなる

に、一挺はだか蠟ろうに灯とうともしたる灯影ほかげすずしく、篔かけひの水むくむくと湧わきて玉ちるあたりに盥たらいを据えて、うつくしく髪結ひとうたる女の、身に一糸もかけで、むこうぎまにひたりていたり。

篔の水はそのたらいに落ちて、溢あふれにあふれて、地の窪くぼみに流るる音しつ。

蠟の灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くろうなりて、ちらちらと眼に映はだえずる雪はだえなす膚白はだえかりき。

わが寝返る音に、ふと此方こなたを見返り、それと頷うなずく状さまにて、片手をふちにかけてつつ片足を立てて盥うなずのそとにいだせる時、颯さと音して、鳥よりは小さき鳥の真白はぎきがひらひらと舞いおりて、うつくしき人の脛はぎのあたりをかすめつ。そのままおそれげものう翼を休

めたるに、ざぶりと水をあびせざま莞爾とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣もてその胸をば蔽えり。鳥はおどろきてはたはたと飛去りぬ。

夜の色は極めてくらし、蠟を取りたるうつくしき人の姿さやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに縁の端に腰をおろすともにも、手をつきそらして振向きざま、わがかおをば見つ。

「気分は癒つたかい、坊や。」

といて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面けだかく、眉あぎやかに、瞳すずしく、鼻やや高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり臍にたけたり。こはかねてわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまえり。知人に

はあらざれど、はじめて逢いし方とは思わず、さりや、誰にかあ
るらむとつくづくみまもりぬ。

またほほえみたまいて、

「お前あれは斑はんみょう猫ねこといつて大變な毒虫なの。もう可いいね、ま
るでかわつたようにうつくしくなつた、あれでは姉ねえさん様が見違える
のも無理はないのだもの。」

われもさあらむと思わざりしにもあらざりき。いまはたしかに
それよと疑わずなりて、のたまうままに領きつ。あたりのめずら
しければ起きむとする夜着の肩、ながく柔かにおさえたまえり。

「じつとしておいで、あんばいがわるいのだから、落着いて、ね、
気をしずめるのだよ、可いいかい。」

われはさからわで、ただ眼をもて答えぬ。

「どれ。」といいて立つたる折、のしのしと道芝を踏む音して、つづれをまとうたる老夫おやしの、顔の色いと赤きが縁近う入り来つ。「はい、これはお児こさまがござらっせえたの、可愛いお児じゃ、お前様も嬉しかろ。ははは、どりや、またいつものを頂きましょか。」

腰をななめにうつむきて、ひったりとかの筧に顔をあて、口をおしつけてごっごっごっごつとたてつづけにのみたるが、ふツといきを吹きて空を仰ぎぬ。

「やれやれうま甘いことかな。はい、参ります。」
と踵くびすを返すを、此方こなたより呼びたまいぬ。

「じいや、御苦勞だが。また来ておくれ、この児を返さねばならぬから。」

「あいあい。」

と答えて去る。山風颯さつとおろして、かの白き鳥また翔たちおりつ。黒き盪はのうちに乗りて羽はづくろいして静まりぬ。

「もう、風邪を引かないように寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静しずかに雨戸をひきたまいき。

九ツ罅

やがて添そいぶし臥ふししたまいし、さきに水を浴びたまいし故にや、わ

が膚はだおりおり慄りっぜん然たりしが何の心ものうひしと取とり縫すがりまいらせぬ。あとをあとをというに、おさな物語二ツ三ツ聞かせたまいつ。やがて、

「一ツこだま笈、坊や、二ツ笈といえるかい。」

「二ツ笈。」

「三ツ笈、四ツ笈といつて御覧。」

「四ツ笈。」

「五ツ笈。そのあとは。」

「六ツ笈。」

「そうそう七ツ笈。」

「八ツ笈。」

「九ツ罇——ここはね、九ツ罇という処なの。さあもうおとなにして寝るんです。」

背に手をかけ引寄せて、玉のごときその乳房をふくませたまいなぬ。あらわ露に白き襟、肩のあたり鬢びんのおくれ毛はらはらとぞみだれたる、かかるさまは、わが姉上とは太いたく違いり。乳をのまむというを姉上は許したまわず。

ふところをかいさぐれば常に叱りたまうなり。母上みまかりたまいてよりこのかた三年みとせを経つ。乳ちの味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似にざりき。垂すいぎよく玉の乳房ただ淡雪のごとく含むと舌にきえて触るるものなく、すずしき唾つばのみぞあふれいでたる。

軽く背をさすられて、われ現うつつになる時、屋の棟、天井の上と覺し、凄まじき音すさしてしばらくは鳴りも止やまず。ここにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わななき取とりつくを抱きしめつつ、
 「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」

とキとのたまえば、やがてぞ静まりける。

「恐こわくはないよ。鼠だもの。」

とある、さりげなきも、われはなおその響ひびきのうちにももの叫びたる声せしが耳に残りてふるえたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまいて、とある蒔絵まきえものの手箱のなかより、一ひと口の守まもり刀がたなを取出しつつ鞆さやながら引ひきそばめ、

雄々しき声にて、

「何が来てももう恐くはない、安心してお寝よ。」とのたまう、たのもしき状さまよと思ひてひたとその胸にわが顔をつけたるが、ふと眼をさましぬ。残ありあけ燈暗く床柱の黒うつややかにひかるあたり薄き紫の色籠こめて、香こうの薫残かおりりたり。枕をはずして顔をあげつ。顔に顔をもたせてゆるく閉とじたまいたる眼の睫毛まつげかぞうるばかり、すやすやと寝入りていたまいぬ。ものいわむとおもう心おくれて、しばし瞻みまもりしが、淋しみしさにたえねばひそかにその唇に指さきをふれてみぬ。指はそれで唇には届かでない、あまりよくねむりたまえり。鼻をやつままむ眼をやおさむとまたつくづくうちと打まもりぬ。ふとその鼻頭はなさきをねらいて手をふれしに空くうを捻ひねりて、うつくしき

人は雛ひなのごとく顔の筋ひとつゆるみもせざりき。またその眼のふちをおしたれど水晶のなかなるものの形を取らむとするよう、わが顔はそのおくれげのはしに頬をなでらるるまで近々とありながら、いかにしても指さきはその顔に届かざるに、はては心いれて、乳ちの下に面おもてをふせて、強く額もて圧おしたるに、顔にはただあたたかき霞のまとうとばかり、のどかにふわふわとさわりしが、薄うすよ葉うひとえ一重の支うるなく着けたる額はつと下に落ち沈むを、心着けば、うつくしき人の胸は、もとのごとく傍かたわらにあおむきいて、わが鼻は、いたずらにおのが膚はだにぬくまりたる、柔き蒲団うもに埋れて、おかし。

渡船

ゆめまぼろし
夢 幻 ともわかぬに、心をしずめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまいし元のまま柔かに力なげに蒲団のうえに垂れたまえり。

片手をば胸にあてて、いと白くたおやかなる五指をひらきて黄金の目貫めぬきキラキラとうつくしき鞆さやの塗ぬりの輝きたる小さき守刀をしかと持つともなく乳ちのあたりに落して据えたる、鼻たかき顔のおむきたる、唇のものいうごとき、閉じたる眼のほほ笑むごとき、髪たがのさらさらしたる、枕にみだれかかりたる、それも違たがわぬに、胸つるぎに剣をさえのせたまいたれば、亡き母上のその時のさまに紛まがう

べくも見えずなむ、コハこの君もみまかりしよとおもういまわし
 さに、はや取除とりのけなむと、胸なるその守刀に手をかけて、つと引
 く、せつぱゆるみて、青き光眼まなこを射たるほどこそあれ、いかなる
 はずみにか血汐ちしおさとほとぼしりぬ。眼もくれたり。したしたとな
 がれにじむをあなやと両の拳こぶしもてしかとおさえたれど、留とどまらで、
 とうとうと音するばかりぞ淋漓りんりとしてながれつたえる、血汐のく
 れない衣きぬをそめつ。うつくしき人は寂せきとして石像のごとく静しずかなる
 鳩みずおち尾のしたよりしてやがて半身をひたし尽しぬ。おさえたるわ
 が手には血の色つかぬに、燈ともにすかす指のなかの紅くれななるは、人の
 血の染そみたる色にはあらず、訝いぶかしく撫なで試たなむる掌そののその血汐には
 ぬれもこそせね、こころづきて見定むれば、かいやりし夜のもの

あらわになりて、すずしの絹をすきて見ゆるその膚はだにまといたま
いし紅の色なりける。いまはわれにもあらで声高に、母上、母上
と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動かし、おしうごかししたりし
が、効かひなくてなむ、ひた泣きに泣く泣くいつのまにか寝たりと覺おぼ
し。顔あたたかに胸をおさるる心地に眼覚めぬ。空青く晴れて日
影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫おじの背せなに負われて、とある
山路を行ゆくなりけり。うしろよりはかのうつくしき人したがい来
ましぬ。

さてはあつらえたまいしごとく家に送おしりたまうならむと推おしはか
るのみ、わが胸うちの中はすべて見すかすばかり知りたまうようなれ

ば、わかれの惜しきも、ことのいぶかしきも、取出でていわむは益やくなし。教うべきことならむには、彼方かなたより先んじてうちいでこそしたまうべけれ。

家に帰るべきわが運ならば、強いて止とどまらむと乞いたりとして何かせん、さるべきいわれあればこそ、と大人しゆう、ものもいわでぞ行く。

断崖だんがいの左右そびに聳そびえて、点滴てんてつする処ところありき。雑草ざつそう高たかき径こみちありき。松まつ柏かしわのなかを行ゆく処ところもありき。きき知らぬ鳥とりうたえり。褐色こせきなる獣けものありて、おりおり叢くさむらに躍なり入りたり。ふみわくる道みちにもあらざりしかど、去年こぞの落葉らくえつ道みちを埋うずみて、人多く通とほう所ところとしも見えざりき。

おじは一挺ちようの斧を腰にしたり。れいによりてのしのしとあゆみながら、茨いばらなど生いしげりて、衣きぬの袖をさえぎるにあえば、すかすかと切つて払いて、うつくしき人を通し参らす。されば山路やまみちのなやみなく、高き塗ぬり下駄げたの見えがくれに長き裾すそさばきながら来たまいつ。

かくて大沼の岸に臨みたり。水は漫々として藍らんを湛たたえ、まばゆき日のかげもここの森にはささで、水面をわたる風寒く、颯々さつさつとして声あり。おじはここに来てソとわれをおろしつ。はしり寄れば手を取りて立ちながら肩を抱いだきたまう、衣きぬの袖左右より長くわが肩にかかりぬ。

蘆間あしまの小舟おぶねの纜ともづなを解きて、老夫おじはわれをかかえて乗せたり。一

緒ならではと、しばしむずかりたれど、めまいのすればとて乗り
 たまわず、さらばとのたまうはしに棹さおを立てぬ。船は出でつ。わ
 ツと泣きて立上りしがよろめきてしりに倒れぬ。舟というもの
 にははじめて乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後うしろに居
 たまえりとおもう人の大なる環わにまわりて前途ゆくてなる汀みぎわに居たま
 いき。いかにして渡し越したまいつらむと思ふときハヤ左手ゆんでなる汀
 に見えき。見る見る右手めてなる汀にまわりて、やがて旧もとのうしろに
 立ちたまいつ。箕みの形したる大なる沼おおいは、汀の蘆と、松の木と、
 建札と、その傍かたわらなるうつくしき人ともろともに緩き環を描いて廻
 転し、はじめは徐ろおもむにまわりしが、あとあと急になり、疾はやくなり
 つ、くるくるくと次第にこまかくまわるまわる、わが顔と一尺

ばかりへだたりたる、まぢかき処に松の木にすがりて見えたまえる、とばかりありて眼の前さきにうつくしき顔の藹ろうたけたるが莞爾にっことあでやかに笑みたまいが、そののちは見えざりき。蘆は繁く丈よりも高き汀に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

おじはわれを扶たすけて船より出だしつ。またその背せなを向けたり。「泣くでねえ泣くでねえ。もうじきに坊うちツさまの家じゃ。」と慰めぬ。かなしさはそれにはあらねど、いうもかいらなくてただ泣きたりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿のごとくう

ちかけらるるよう肩に負われて、顔を垂れてぞともなわれし。見
 覚えある板塀のあたりに来て、日のややくれかかる時、老夫はわ
 れを抱き下して、溝のふちに立たせ、ほくほく打えみつつ、慇
 懃いんぎに会釈したり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」

といわずてに何地いずちゆくらむ。別れはそれにも惜しかりしが、あ
 と追うべき力もなくて見おくり果てつ。指す方もあらでありくと
 もなく歩をうつすに、頭かしらふらふらと足の重たくて行悩む、前に行
 くも、後ろに帰るも皆見知越みしりこしのものなれど、誰も取りあわむと
 はせで往きつ来りつす。さるにてもなおものありげにわが顔をみ
 つつ行くが、冷かに嘲るがごとく憎さげなるぞ腹立はらだたしき。おも

しろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向直りて、とほとほと
また山ある方かたにあるき出いだしぬ。

けたたましき登あしおと音おとして 驚わしづかみ 掴つかに襟えりを掴つかむものあり。あなや
と振返ればわが家の後うしろみ 見せる奈四郎といえる力たぐ遅おそましき叔父の、
凄すざまじき気色けしきして、

「つままれめ、どこをほつつく。」と喚わめきざま、引ひ立たたてたり。ま
た庭に引ひ出いだして水をやあびせられむかと、泣叫なびてふりもぎる
に、おさえたる手をゆるせず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背うを拍うちて宙うにつるしながら、走りて家に
帰かえりつ。立騒たてさわぐ召めつかいどもを叱なりつも細ほそ引びきを持もて来こさして、

しかと両手をゆわえあえず奥まりたる三畳の暗き一室ひとまに引立ひつたてゆきてそのまま柱いましに縛めたり。近く寄れ、喰くいさきなむと思うのみ、齒がみして睨にらまえたる、眼の色こそ怪しくなりたれ、逆さかつりたるまなじり眦まなじりは憑よきもののわざよとて、寄りたかりて口々にののしるぞ無念なりける。

おもての方かたさざめきて、いづくにか行ゆきおれる姉上あねさま帰りましつと覚おぼし、襖ふすまいくつかぱたぱたと音してハヤここに來たまいつ。叔父は室の外にさえぎり迎えて、

「ま、やっと取返したが、繩を解いてはならんぞ。もう眼が血走エテつていて、すきがあると駈かけ出すじや。魔エテどのがそれしよびくでの。」

と戒めたり。いまし。いうことよくわが心を得たるよ、しかり、隙ひまだにあらむにはいかでかここにとどまるべき。

「あ。」とばかりにいらえて姉上はまろび入りて、ひしと取着きたまいぬ。ものはいわでさめざめとぞ泣きたまえる、おん情手なさけにこもりて抱いだかれたるわが胸絞らるるようなりき。

姉上の膝ふに臥ふしたるあいだに、醫師きた来りてわが脈をうかがいなどしつ。叔父は醫師とともに彼方あなたに去りぬ。

「ちさや、どうぞ気をたしかにもつておくれ。もう姉様ねえさんはどうしようね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだろう、私だよ。」

といきつくづくじつとわが顔をみまもりたまう、涙痕るいこんしたた

るばかりなり。

その心の安んずるよう、強いて顔つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おお、薄気味が悪いねえ。」

と傍かたわらにありたる奈四郎の妻なる人つぶや呟きて身ぶるいしき。

やがてまた人々われを取巻きてありしことども責むるがごとくに問いぬ。くわしく語りて疑うたがひを解かむとおもうに、おさなき口ときあの順序正しく語るを得むや、根問ねもんい、葉問はもんいするに一々説明ときあかさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつつ心に何をかいいたる。

ようやくいましめはゆるされたれど、なお心の狂いたるものとしてわれをあしらいぬ。いうこと信ぜられず、すること皆人うたがひの疑

を増すをいかにせむ。ひしと取籠めて庭にも出さで日を過しぬ。
 血色わるくなりて瘦せもしつとて、姉上のきづかいたまい、後
 見の叔父夫婦にはいとせめて秘しつ、そとゆうぐれを忍びて、
 おもての景色見せたまいしに、門辺にありたる多くの児ども我が
 姿を見ると、一斉に、アレさらわれものの、氣狂の、狐つきを
 見よやといういう、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不断親
 しかりし朋達なり。
 姉上は袖もてわれを庇いながら顔を赤うして遁げ入りたまいつ。
 人目なき処にわれを引据えつと見るまに取つて伏せて、打ちたま
 いぬ。

悲しくなりて泣出せしに、あわただしく背をばさすりて、

「堪忍しておくれよ、よ、こんなかわいそうなものを。」
 といいかけて、

「私あもう気でも違いたいよ。」としみじみと搔口説きたまいたり。いつのわれにはかわらじを、何とてきはあやまるや、世にただ一人なつかしき姉上までわが顔を見るごとに、氣を確たしかに、心を鎮めよ、と涙ながらいわるるにぞ、さてはいかにしてか、心の狂いしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむようそのたびになりまさりて、果はてはまことにものくるわしくもなりもてゆくなる。

たとえば怪しき糸の十重とえはたえ二十重にわが身をまとう心地しつ。しだいしだいに暗きなかに奥深くおちいりてゆく思おもあり。それをば刈払い、遁のがれ出いでむとするにその術すべなく、すること、なすこと、

人見て必ず、眉を顰め、ひそ嘲り、あざけ笑い、いやし卑め、ののし罵り、かなしはた悲み憂い
などするにぞ、氣あがり、心激し、ただじれにじれて、すべての
もの皆われをはらだたしむ。

口惜しく腹立たしきまま身の周囲はまわりことごとく敵ぞと思わるる。
町も、家も、樹も、とりかご鳥籠も、はたそれ何等のものぞ、姉とてま
ことの姉なりや、さきには一たびわれを見てその弟を忘れしこと
あり。塵一つとしてわが眼に入るは、いすべてものの化けしたるにて、
恐しきあやしき神のわれを悩まさむとて現じたるものならむ。さ
ればぞ姉がわが快復を祈る言もわれに心を狂わすよう、わざとさ
はいうならむと、一たびおもいては堪うべからず、力あらば恣ほしいままに
ともかくもせばやせよかし、近づかば喰いさきくれむ、蹴飛ばし

やらむ、搔かきむしらむ、透すきあらばとびいでて、九ツこだま筈とおしえたる、
 とうときうつくしきかのひとの許もとに遁げ去らむと、胸の湧わきたつ
 ほどこそあれ、ふたたび暗室にいましめられぬ。

千呪陀羅尼

毒ありと疑えばものも食わず、薬もいかでか飲まむ、うつくし
 き顔したりとて、優しきことをいいたりとて、いつわりの姉には
 われことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとしいえば、たけり
 くるい、罵ののり叫びてあれたりしが、ついには声も出でず、身も動
 かず、われ人をわきまえず心地死ぬべくなれりしを、うつらうつ

ら昇かきあげられて高き石壇をのぼり、大なる門おおいを入りて、赤土の
 色きれいに掃きたる一ひとすじ条の道長き、右左、石燈籠いしどうろうと石榴ざくろの樹
 の小さきと、おなじほどの距離にかわるがわる続きたるを行ゆきて、
 香こうの薫かおりしみつきたる太まるぼしき円まるぼし柱ちゆうの際まに寺の本堂に据えられつ、
 ト思う耳のはたに竹を破わる響ひびききこえて、僧ども五三人一齊に声を
 揃とくろえ、高らかに誦じゆする声耳こゝろを聳ろうするばかり喧かしましき堪こゝろうべからず、
 禿とくろ顛てんならび居る木のはしの法師にんばら、何あたをかすると、拳こぶしをあげて
 一人にんの天窓あたまをうたんとせしに、一ひと幅はばの青さつき光さつ颯さつと窓を射うて、水
 晶の念珠瞳うずくをかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひるみて踞うずくまる
 時、若じゃく僧そう円柱えんちゆうをいざり出でつつ、つい居て、サラサラと金きん
 欄らんの帳とばりを絞しぼる、燦さんらん爛らんたる御廚みずし子のなかに尊すがたき像がたこそ拜ままれた

れ。一段高まる経の声、トタンにはたたがみ天地に鳴りぬ。

端巖たんげん微妙みみょうのおんかおばせ、雲の袖、霞の袴はかまちらちらと瓔ようら

路くをかけたまいたる、玉なす胸に織手せんしゅを添えて、ひたと、お
 さなごを抱いだきたまえるが、仰ぐ仰ぐ瞳うごきて、ほほえみたまう
 と、見たる時、やさしき手のさき肩にかかりて、姉上は念じたま
 えり。

滝やこの堂にかかると、折しも雨の降りしきりつ。渦うづまいて寄
 する風の音、遠かたき方より呻うなり来て、どつと満山うちに打あたる。

本堂 青あお光ひかりして、はたたがみ堂の空をまるびゆくに、たまぎ
 りつつ、今は姉上を頼までやは、あなやと膝にはいあがりて、ひ
 しとその胸を抱いだきたれば、かかるものをふりすてむとはしたまわ

で、あたたかき腕かいなはわが背せなにて組合わされたり。さるにや気も心もよわよわとなりもてゆく、ものを見る明かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降りのなかに陀羅尼だらにを呪じゆする聖ひじりの声々さわやかに聞きとられつ。あわれに心細くもの凄すこきに、身の置おきどころ 処 あらずなりぬ。からだひとつ消えよかすと両手を肩すがに縋りながら顔もてその胸を押しわけたれば、襟をば搔きひらきたまいつつ、乳ちの下にわがつむり押入れて、両袖うちを打かさねて深くわが背せなを蔽おおいたまえり。御みほとけ 仏ぶつのそのおさなごを抱いだきたまえるもかくこそと嬉しきに、おちいて、心地すがすがしく胸のうち安く平らになりぬ。やがてぞ呪もはてたる。雷らいの音も遠ざかる。わが背をしかと抱いだきたまえる姉上の腕かいなもゆるみたれば、ソとその懐より顔をいだしてこわご

わその顔をば見上げつ。うつくしきはそれにもかわらでなむ、いたくもやつれたまえりけり。雨風のなおはげしく外おもてをうかがうことだにならざる、静まるを待てば夜もすがら暴通あれしつ。家に帰るべくもあらねば姉上は通夜したまいぬ。その一夜の風雨にて、くるま山の山中、俗に九ツ筈そまといいたる谷、あけがたに杣そまのみいだしたるが、たちまち淵ふちになりぬという。

里こぞの者、町の人皆挙りて見にゆく。日を経てわれも姉上とともに来り見きたき。その日一天うらかに空の色も水の色も青く澄みて、軟風おもむろに小波ささなみわたる淵の上には、塵ちりひとは一葉うかの浮べるあらで、白き鳥の翼広きがゆたかに藍碧らんぺきなる水面を横ぎりて舞えり。すさまじき暴風雨あらしなりしかな。この谷もと葉研やげんのごとき形した

りきとぞ。

幾株となき松まつかしわ柏かしわの根こそぎになりて谷間に吹倒されしに山

腹の土落ちたまりて、底をながるる谷川をせきとめたる、おのず

からなる堤防をなして、凄すさまじき水をば湛たえつ。一たびこのとこ

ろ決潰けつかいせむか、城の端じょうはなの町は水底みなそこの都となるべしと、人々の

恐れまどいて、怠らず土を装もり石を伏せて堅き堤防を築きしが、

あたかも今の関屋少将の夫人姉上十七の時なれば、年つもりて、

嫩ふたばなりし常磐木ときわぎもハヤ丈のびつ。草生おい、苔こけむして、いにしえよ

りかかりけむと思まがい紛まがうばかりなり。

あわれ礫つぶてを投なずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、

血気なる友のいたずらを叱とどり留とどめつ。年若おもてく面清き海軍の少尉候

補生は、薄暮暗碧を湛えたる淵に臨みて肅然とせり。

明治二十九（一八九六）年十一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月

初出：「文芸倶楽部」

1896（明治29）年11月

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

龍潭譚

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>